

インド・ヒマラヤ植物紀行

清水 建美

T. Shimizu : A botanical trip to the Indo-Himalayas

私は、高山植物やツリフネソウ科の植物を研究対象にしているが、ヒマラヤや中国南部の調査あるいは資料の入手が欠かせない。しかし、ヒマラヤ調査は東大グループときまった感があって、なかなかメンバーには入れてもらえない。幸い、昨年のはじめ、10年来の友人であるデリー大学のクマール教授が、一度来ないかと誘ってくれたので、御好意に甘えて出かけることにし、昨年夏7月4日～8月8日の5週間、インド・ヒマラヤへの旅が実現した。

気候 デリーの夏はとても暑い。最高気温は 52°C 、最低は -0.6°C 、年降水量は642mm、6月中旬～9月下旬が雨季である。7月4日、降り立った空港の気温は午後9時というのに 37°C であった。暑さ逃れのためか、真夜中のデリー市内には道路脇の街路樹の下に毛布を敷いてねている人の姿を何人もみかけた。

インドも昨年は異常気象で、雨季の開始はデリーでは例年より4週間おくれの7月26日、今までの記録では7月20日が最もおそい雨季入りだったというから、昨年は新記録であった。しかも、雨季に入っても雨の量は極端に少く、インド全土は干ばつの危機にさらされた。残念なことに、デリー大学の宿舎には、天井に大きな扇風機がぶら下がっているだけで、熱帯夜の連続には長く耐えられそうもなく、早々にヒマラヤへと北上することにした。

生活 円高の故もあり、インドの物価は大へん安い。タクシーは空港から大学まで45分乗車で110ルピー

つまり1320円（1ルピーは12円）、大学のゲストハウスは、2泊4食（朝・昼・夕・朝）で780円、ヒマラヤのポーターは6日間で4,800円、ジュース1本36円、地方バスは10時間半乗車で648円といったところである。

交通手段は多種多様で、旅行者には人力車（リキシャ）・自動3輪（オートリキシャ）・馬車・バス・タクシー・鉄道がある。鉄道網は全国に敷かれ、バスは山村の奥まで入り込んでいるので大へん便利である。大きな荷物がある時など、駅でもバス停でも大ぜいのポーターが押しかけて来るので大へん助かる。

食事は常食は、チャパティに米飯、ダルというカレーで煮た野菜、タマネギを輪切りにしたサラダといった組み合わせが最もふつう、ステンレスの皿の御飯の上にダルをぶっかけて右手の指先でこねまわして食べる。チャパティは手でちぎって、ダルをつけて食べる。高級ホテルのレストランはともかく、町角のレストランや田舎のホテルではほとんど衛生観念がないので注意が必要である。もちろん、生水は飲めない。インドの電圧は220Vであるが、田舎のホテルにも大学の宿舎にも220Vの電源が引かれてあり、さし込み用のヒーターは容易に入手できるので、私は電源のあるところでは毎晩、湯を湧かし、ときには調理もした。インドの山村では、鶏卵以外、タンパク質食品は手に入らないので、日本から持参

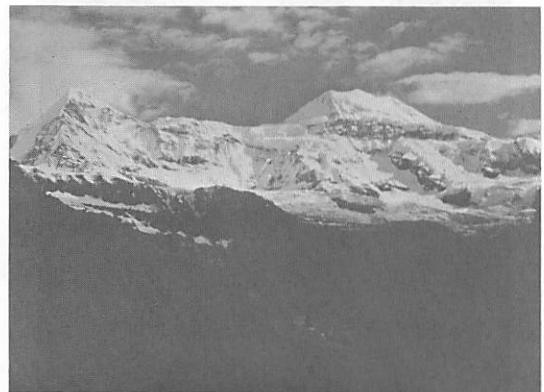


写真1. ヒマラヤの峰々、ナンダ・カートと
パワリ・ドワール（左）



写真2. *Rhododendron arboreum*

したインスタント食品をこの方法で調理し、タンパク質を補給したものだ。

もう一つ、大事なことはインドではトイレットペーパーは使わないということだ。ふつう便器のかたわらまで水道栓が設けられていて、水洗するのである。空港や外国系ホテルには備えてあるが、ある日、中都市のホテルで請求したところ、テーブル用のナプキンをくれた。地方に行くと、もはや町で買い求めることもできない。

ガルワールヒマラヤ ガルワールヒマラヤは、ネパールの西方、西のサトレジ川、東のカリ川にはさまれた地域で、大部分がウッタル・プラデッシュ州に含まれる。私が、ヒマラヤ探訪に選んだのはまず、盟峰ナンダコート（8861m）とナンダカート（6611m）の間から流れ下るビンダリ川の上流、ビンダリ



写真4. *Meconopsis aculeata*



写真3. *Sibbaldia purpurea*

氷河であった。

後記の旅程に示した通り、デリーから車で東のバーレーリー（240m）に至り、ここからジープで北上、ハルドワニ（500m）、ナイニタール（1860m）、アルモラ（1560m）、バーゲショ（870m）を経由し、ロハルケット（1650m）につく。こゝは、バスの終点でもあり、トレッキングの基点でもある。ビンダリ氷河への道は、なかなか整備されており、200mごとの石の里程標がある。ロハルケットから1日で24kmをダクリ（2360m）を通過し、上下をくり返ししながら最終の山村カーチ（2180m）まで歩いた。ヒマラヤの山中には1日の旅程ごとにゲストハウスと称する石づくりの家が建てられていて、宿泊所の心配がないのが大助かりだ。カーチの部落の木立の間からナンダ・コートの白銀がのぞき、感激



写真5. *Cassiope fastigiata*

を覚える。植生は常緑のカシにシャクナゲやネジキを混えた照葉樹林である。トレッキングの第2日はドワリ(2750m)を経てブルキア(3260m)までの16km。常緑樹に混ってカエデやトチノキ、モミの仲間が現われる。カシ類はこのルートでは、2700mが上限であった。そして、第3日、ナンダカートの雄姿を左手にみながら、高山植物の咲き競う高山帯に出る。森林限界は3300mあたりであろうか。左右の尾根には、カバノキがみられる。高山帯の光景は、天山のそれによく似て、草原には羊や山羊が群れてはいるが、その広大さの故か高山植物がふみ荒らされたという実感が無いのが嬉しい。ヒマラヤのシンボル、ブルーポピー(写真4)もところどころにみられる。トレッキングを始めて3日目の午前11時45分、ついにビンダリ氷河の末端に立った。

付近の植物を点描しよう。日本アルプスとの共通種は、ムカゴトラノオ・ジンヨウスイバ・キバナノコマノツメ。一見全く同種とも思えるタカネイワヤナギ・クモマキンボウゲ・ムカゴユキノシタ・ウラジロキンバイの仲間は、谷の斜面のガレ地には事欠かない。高山帯下部に優占するシャクナゲは *Rhododendron arboreum* (写真2) であるが、これは標高1500~3600mに生育し、高山帯では白花、下では赤花が咲くという。こゝではようやく白色の残り花1個にめぐり逢うことができた。最もめだつ草花は、真紅の花のキジムシロ属、ついで紫花の数種のシオガマギクの仲間、タテヤマキンバイ属には黄花のほか、紫花の1種(写真3)もみられるし、青

い実のシラタマノキの仲間というのも面白い。岩上にはイワヒゲの1種(写真5)、イブキジャコウソウの1種、茎のない矮性のマンテマも多い。その他、オキナグサ属・タネツケバナ属・ウメバチソウ属・オランダイチゴ属・オヤマノエンドウ属・フウロソウ属2種、サクラソウ属・ヤハズハハコ属・ウスユキソウ属・ヨモギ属等々、属レベルではほとんどすべて日本と共通である。ヒマラヤと日本との縁の深さを実感しつつ、2日間の探索の後、ビンダリ氷河を後にした。

旅程抄録 今回の5週間にわたるインド紀行のすべては、紹介しきれないので旅行日程だけ記しておきたい。

7月4日 デリー着、日本との時差は-3.5時間、
塔乗時間は9.5時間

7月6日~8日 デリー→バーレーリ→アルモラ
→バーゲシュア

7月9日~15日 バーゲシュア→ビンダリ氷河

7月18日~20日 ゴペーシュア(1650m)→チャン
ドラシラ(3750m)

7月21日~22日 ゴペーシュア→ゴルドナート(3780
m)

7月24日~25日 ゴペーシュア→デラデュン→デリー

7月29日 デリー発、ジャンム・カシミールの州都
スリナガル着、塔乗時間1時間

7月30日~8月3日 カシミール・ヒマラヤ探訪

8月4日 スリナガル→デリー

8月7日~8日 デリー発 帰国

〔植物ニュース〕 121. タカネアオチドリ

Coeloglossum viride (L.) Hartm. var.
akaishimontanum Satomi

アオチドリの高山型で、高さ10cm以下と低く、萼片の長さも5mmと短いとされているもの。南アルプスに産出するとされていた。最近八ヶ岳にもあると記載されているものがある。

1987年に八ヶ岳で、この記載よりやや大型であるが、硫黄岳、赤岳、阿弥陀岳の3ヶ所の高山帯でこれに該当するものを確認することができさで報告する。(今井建樹)

122. イヌヒメコゾチ *Salvia reflexa* Hornem.

岡谷市の諏訪湖に流入する横河川の河口近くで採集した。昭和54年7月31日に採集した標本を整理していた中から出てきたものである。現在もその付近に繁殖しているかどうか不明である。中・北米原産の帰化植物で1年草、長田氏の図鑑によると、村田源が

「太田久次氏1955年6月津市で採集」として和名を与えたとある。本県に帰化しているということを知っていないので報告する。(今井建樹)

「長野県植物誌チェックリスト1988年版」

昭和53年4月に発足した長野県植物誌編纂事業は本年3月丸10年を経過した。10年を記念して1984年版に続き、チェックリスト1988年版をつくった。

これは、本年1月末日までに集積されたデータを1984年版にならって市町村ごとに配列したものである。データ数はこの間に約5万点ふえ、総数171312(標本60573点、調査記録110332点)となった。それでもまだ、調査空白地はいくつか見つかるし、正体不明の種類もかなりある。植物誌のための前段として、このチェックリストが活用されることを願って止まない。御入用の方は領布価格1500円送料250円をそえて事務局宛申し込まれたい。(清水建美)